

基幹共同研究 1 非文字資料研究ネットワーク形成研究

歴史民俗資料学研究と画像データベース

富澤 達三
TOMIZAWA Tatsuzo

はじめに

ことわざに「百聞は一見に如かず」とあるように、画像史料は我々の眼に直接的に訴えかけてくる。日本史研究においては、主として中世史分野で、文献史料には書かれない庶民の暮らしを探るために絵巻物や都市の屏風絵が、かつての耕地のありようを探るために荘園絵図が使われた。また日本史教科書に載る著名な武将の肖像画が全く別人のものであり、なぜそのようなことが起こってしまったのかを解き明かす、知的好奇心溢れる研究もあった。

1990年代後半からの「IT革命」により、パソコンの性能が劇的に向上するのと逆に、機器の価格は下がった。とくに記憶媒体であるハードディスク容量の飛躍的増大、大画面の液晶モニターの登場、デジタルカメラがフィルムカメラを駆逐してしまったことなどで、必要最小限の機材やソフトは数十万円で揃えることができるようになった。博物館や大学、そして個人研究者にとって画像史料研究を進め易い状況が整ったといえる。とくに高画質デジタルカメラの普及は革命的変化⁽¹⁾で、収集した多数の高精彩画像をパソコンで数百枚分析することが可能となったのである。

また、近世に江戸幕府の命により制作された国絵図のように、巨大で閲覧のためにモノを広げることが困難であるもの、国宝級の貴重な絵巻や屏風などは、数日かけて4×5判や8×10判のポジフィルムを使い分割撮影され、デジタル化ののち接合し解析されていた。現在ではパソコンの処理能力の向上で、画像を一枚に合成した数ギガバイトの大容量画像を簡単にやりとりし、解析することが可能となった。緻密に描かれた国絵図や都市図は、図像上の情報が膨大であり、原図では容易に見ることができない「部分」をモニター画面で拡大し、貴重な史料を痛めること無く絵を見ることができるようになったのである。現在、高度な機材や装置なくしては到底撮影できない画像史料のデジタルデータは、諸機関のホームページ上で公開が進み、ネット環境の向上でストレスなく閲覧することが可能となっている。

1 画像史料研究への注目

東京大学史料編纂所は、1997年4月より「日本史に関する各種画像史料および画像資料情報を収集・整理して系統的に蓄積するとともに、電子計算機等による画像情報処理を生かして解析・研究を

行い、その成果を学内外に公開する」ことを目的とする「画像史料解析センター」を開設した。日本の歴史学を牽引する立場にある公的機関だけあって、豊富な資金と内部・外部の人材による意欲的な最先端の研究が行われている。発足当時は①「絵画資料解析」(a 肖像画・屏風絵・絵巻 b 絵図・古地図)、②「画像史料解析」(a 錦絵・摺物〔瓦版〕 b 古写真)、③「古文書画像解析」(a 古文書・古記録 b 花押)の三分野で、数年間のプロジェクトが立ち上げられ、目録出版やデータベース公開などで成果が発信されていた。以下で研究対象となっている画像史料について概要を簡単に説明したい。なお、三番目の「古文書画像解析」に関しては、文献史料のデジタル化と解析であるので、画像史料を論じる本稿では除外する。

「絵画資料解析」「画像史料解析」の二分野であるが、まず「絵画資料解析」(a 肖像画・屏風絵・絵巻 b 絵図・古地図)について述べる。これは武士・貴族・有力寺社などの支配階級が、専門の画家に制作させた美術品・公的な絵図で、まさに一級品である。実物は細心の注意を以て扱われ、撮影は特殊な機材(特注のスタンド類など)や専用撮影室が用意され、大型ポジフィルム(4×5判や8×10判)で撮影されるので、資金と人材に恵まれた国立機関向きの研究対象と言えるだろう。

次に「画像史料解析」(a 錦絵・摺物〔瓦版〕 b 古写真)である。「錦絵と摺物史料」であるが、錦絵(浮世絵版画)は江戸時代、庶民向けの本屋から出された一枚ないし数枚物の出版物で、日本を代表する庶民の美術品である。多くの浮世絵版画が明治期以降に国外愛好家に買い求められ、米国と欧州の美術館・コレクターが日本国内以上の点数を所蔵している。また摺物(いわゆる瓦版)は、事件を伝えた有料のものから日常的な宣伝チラシ、占いのおみくじや寺社のお札まで含む、墨一色摺りの印刷物である。これらは被支配階級が残した画像史料である。日本の近世社会は、民間に文書や記録類などの文字史料を膨大に残したが、絵の史料も多いのである。多色摺りの錦絵をはじめ、名所記や農書・草双紙類などの出版物の挿絵、絵心のある学者や知識人が日記や旅行記に記録のために描いた絵、村の耕地や用水・入合地などを描いた絵図や祈願のための絵馬など、多様な画像史料が町や村に残っている。

近世における民間の画像史料として、多くの研究蓄積があるのは肉筆や版画による浮世絵であるが、これは有名画家による名品の美術史的研究が中心であった。名品以外の、町の風俗や世相を盛り込んだ錦絵や、日常生活により密着した印刷物であった摺物を、史料編纂所が歴史資料として整理しデジタル公開を行った意義は大きい。最後に古写真であるが、史料編纂所所蔵の古写真⁽⁴⁾は、写真技術の黎明期に撮影された扱いの難しい資料である。やはり高度な修復・保存技術部門を持つ国立機関向けの画像史料といえよう。

画像史料解析センターの研究成果は、各種の定期出版物で公開されている。なかでも季刊で出されるニューズレター『東京大学史料編纂所付属 画像史料解析センター通信』(1998～2011年1月号までで52号。続刊中)には、「文献案内」として画像史料関係の歴史研究の論文・文献紹介(800字程度)と「画像史料関係文献目録」(執筆者・タイトル・出典等を掲載)がある。主として日本史研究者向けに、地域博物館・史料館・美術館等の紀要から画像史料を実証的に研究した論考が選ばれており、画像史料研究の動向をつかむため便利な情報である。

2 個人による画像史料研究

2-1 「鯰絵」をめぐって

著者は、安政2年(1855)10月2日夜の安政江戸地震後、大被害を受けた江戸で約2ヶ月間にわたって大量に出版された無署名・無検閲の錦絵(浮世絵版画)である「鯰絵」を一次史料として、本格的な画像史料研究を始めた。錦絵は「あづま錦絵」と呼ばれた江戸の名産品で、歌舞伎役者を描いた役者絵、美女を描いた美人絵、全国各地の景勝地のちには大都市や近郊にある行楽地を描いた名所絵、歴史上の勇者など勇猛果敢な豪傑たちを描いた武者絵などがある。近年は男女の交合を描いていることから、正面から取り上げられることが憚られていた春画の研究も行われ、研究書や一般向きのムックも出版されている。

錦絵には風刺画もあるが、一般に江戸時代の風刺画は「うがち」や「見立て」を使ったり、歴史画や戯画になぞらえた「判じもの」となっており解釈は容易ではない。なお江戸時代は為政者の風刺や時節めいた話題を題材とする出版は厳禁であり、「判じもの」の錦絵風刺画は、一部の絵師が出したに過ぎない。しかし、「鯰絵」は10月2日から約2ヶ月間150点以上が続々と出版され、絵の周囲にも多くの文字が彫刻されており、難しい「判じ」はあまり使われていない。錦絵の版元たちは、通常の絵が地震で売れなくなったので、多くの絵師に「鯰絵」を描かせたと推測されている。

「鯰絵」は藤沢衛彦など一部の風俗史家や浮世絵研究家によって収集や分析が行われていたが、1970年代にオランダの文化人類学者アウエハントによる構造主義的手法による読み解きがおこなわれ、同氏の著書『鯰絵 民俗的想像力の世界』(せりか書房, 1979)の出版により、「鯰絵」の語も定着した。忘れられた絵師であった東洲斎写楽が、ドイツの心理学者ユリウス・クルトにより明治末期に見出され、日本で写楽作品の評価が一躍高まったのと同様、錦絵としては際物の「鯰絵」も、外国人研究者により脚光を浴びることとなったのである。

筆者は、埼玉県立歴史と民俗の博物館・鹿島町・国立国会図書館などが所蔵するフィルムや図録をもとに、紙焼きや図版のカラーコピーによって画像を得、版面上の文字をワープロ専用機で打ち、「鯰絵」を解析した。なお、江戸時代の庶民向け読み物は音読するのが普通であったので、平仮名主体で漢字には「読みがな」(現在でいうルビ)が振られている。錦絵上の詞書きの漢字は読みがなも含めて解読し、テキストデータ化しなければならないと気づいたのは、やや後になってからのことであった。また江戸時代の読み物では、現在のように漢字の音とふりがなが一致しているわけではなく、例えば「殺人」は「さつじん」ではなく「ひとごろし」とふりがなが付けられていることもある。読みを含め解読しワープロ打ちすることで、錦絵上の文字情報量は2倍以上になるが、明治期以降も続く、庶民向け出版物における「漢字・ふりがな文化」の実態を物語る事例として、丁寧な解読が必要であると考えた。

2-2 デジタルデータベースの作成

博士後期課程在籍中には東京大学社会情報研究所(現、情報学環)において、同図書室が所蔵する「小野秀雄コレクション」のうち、明治初期の錦絵新聞(新聞錦絵)・幕末のかわら版資料合わせて1800点ほどの全文解読とデジタルデータベース化に携わることとなった。社会情報研究所50周年記

念事業として、前記史料の「①デジタルデータベース作成（ホームページ上での簡易版の公開とCD版データベース作成）」「②研究成果の展示による公開」「③論集の出版」の三本柱で計画が進められた。⁽⁵⁾ 研究対象となる史料の大きさは撮影の手間を考えると重要な問題となるが、錦絵新聞（新聞錦絵）⁽⁶⁾のサイズは江戸期以来の大判（約37×27cm）が多く、一方かわら版のサイズは多種多様で、なかには長辺が100cm近い作品も見られたが、この程度の大きさならば撮影は困難ではない。

大学院生グループの協力を得て、史料解読作業は進んだが、1990年代中期にはポジフィルムを高解像度でデジタル化し、パソコン上で見るには潤沢な資金がなければ難しい状況にあっ⁽⁷⁾た。なお、撮影対象となる史料が容易に閲覧出来る場合は、撮影画像は史料を同定出来る程度の画質でよく、デジタルデータベースは史料を確実に探すための目録として構築する方法もある。実際に史料館や図書館では目録型のデータベースが作られている。一方、「小野秀夫かわら版・錦絵新聞（新聞錦絵）コレクション」のデジタルデータベースは「史料情報公開型」といえるものを目指し、中解像度の画像（データベースの動作にストレスを与えない容量の画像）、法量・作者・発行年などの各種書誌情報、図像上の文字情報が収録された。なお文字データのデジタル化にも一工夫を盛り込んだ。前述の通り、錦絵新聞（新聞錦絵）やかわら版の漢字には読みがながあり、これをモニター上でテキストデータ化するために「新聞錦絵（しんぶんにしきえ）」といった、漢字の直後に（ ）で読みがなを付ける方法を採用し、改行部分は／で示した。また、著者はおもにかわら版の文字解読を担当したが、その結果、かわら版では江戸・大坂で文体・かな文字使用法に共通性が見られることがわかってきた。のち「黒船かわら版」を事例に、かわら版は描かれた画像は不正確であるが、災害の発生日時や黒船の来航・異国人の貿易要求といった、事件の核心は伝達しているメディアである、との結論を得た。⁽⁸⁾

2-3 「時事錦絵」の定着、そして終焉

アウエハントの研究で一躍脚光をあびた、安政2年（1855）の「鯨絵」同様、幕末維新时期には江戸の重大事件を描いた錦絵ブームが幾つかあった。文久2年（1862）の「はしか絵」（80種以上）、維新时期の「子供遊絵」「大人遊絵」（100種以上）などである。これらは時の話題を描いた「時事錦絵」として概念規定できる。明治7～8年に最も盛り上がりを見せた錦絵新聞（新聞錦絵）も「時事錦絵」として位置づけることが可能である。現在までの調査では、「時事錦絵」は西南戦争時に一つのピークを見せたと考える。幕末の錦絵による風刺画は、「はんじもの」から、次第に誰にでも理解できる即物的な「時事錦絵」へと変化し、明治期には一つのジャンルとして定着したのである。⁽⁹⁾

前述の通り、錦絵はこれまでは博物館図録や画集によって公開されていたが、有名絵師の名品に限られ、博物館や美術館が所蔵するコレクションの一部にとどまっていた。無名絵師の作品、破損や汚れがあるものは無視されがちであった。しかしながら現在のネット環境を考えると、これらを含めてコレクションをまるごと公開することが可能である。書誌情報や図像上の文字などの解読を基礎データとして、低解像度の画像公開にとどめることで画像データの転載を防止し、画像史料を逐次公開していくことが可能であり、現在はそのような方向で情報公開が進みつつある。

錦絵は明治時代にも盛んに出版されたが、石版画が登場し、明治30年代に絵はがきブームがおこると画像メディアの花形では無くなった。石版画・絵はがきは、ともに「写真的画像をいかに表現するか」に苦心したメディアである。幕末期に日本へ写真技術が伝わって以降、名所や役者・美人・市

井の風俗など、これまで錦絵に描かれていたテーマが写真で撮られた。板ガラスの一点ものから、印画紙へ焼き付け、複製することが可能になったが、一般の人々にとっては手の届かない高価な品であった。そこで写真の質感をもった図像を安価に複製するため、石版画の技術が使われたのである。

石版画で描かれたテーマのうち、錦絵には無かったものとして貴顕の絵＝天皇の絵が注目される。明治初期、明治天皇は「顔の見える君主」として登場し、やがて主要政治家も印刷メディアに「顔」を見せはじめる。⁽¹⁰⁾これは近世の日本に無い政治文化であった。やがて明治中期になると本格的な似顔絵風刺画が登場するのである。清水勲氏らのジョルジュ・ビゴー研究では、ビゴーら外国人画家が明治期の「顔」の描き方に革命的变化をもたらしたことが既に指摘されている。しかし、明治期の日本における「似顔絵文化」の受容と定着の実証的解明はなされていない。「写真的画像」の人気と「似顔絵風刺画」が錦絵の顔表現に革命的变化をもたらし、筆からペンへの描画方法の変化と、絵の大量出版を可能にした新印刷技術が錦絵の表現を決定的に「古いもの」とし、ビジュアルメディアの転換が起こり、次代の新たな「画像と文字による視覚文化」が生まれたと推測する。以上のシェーマの実証については今後の課題としたい。

2-4 エフェメラの収集と研究

エフェメラとは「一日ないしは短時間だけしか存在しないもの」を指すギリシア語起源の語で、つかの間だけ用いられる意図で作られ、使用後は保存されることもなく、すぐに捨てられ消えてしまう一時的な印刷物の総称である。図書館情報学では、手書き原稿や手紙 (Manuscript)、タイプライターで打たれた原稿 (Typescript)、写真などと区別して、ポスター・絵はがき・カード・ピラ・パンフレットなどの一枚刷り印刷物をエフェメラと呼ぶ。⁽¹¹⁾これらを一次史料として使った近現代史研究も盛んになっており、史料整理と公開も進んでいる。

エフェメラルメディアは機械印刷で膨大な量が複製された儂い消耗品で、近代以降に発達したメディアである。時代を象徴するデザインを使い時の風俗を巧みに盛り込み、近代的教育を受け新たな社会勢力として勃興した「大衆」に享受された。エフェメラルメディアは大衆の心性に訴えかけ、宣伝媒体として商品の購買意欲をくすぐり、日々の生活を豊かにする娯楽物として人々に利用された。そして後には、大衆を動員する情報媒体として力を発揮することとなる。エフェメラルメディアの成立は、前近代にあったメディアと無関係ではなく、先の時代の表現技法・販売機構、そして享受する人々を受け継ぐことで大量に流通することになったと考えられる。手描きの版は、当初モノクロであったが、後に多色印刷となった。

現在最も研究が進んでいるエフェメラルメディア史料は絵はがきであろう。明治40年代には写真製版技術が絵はがきに応用され、人物や景色などの写真をもとに印刷写真画像が安価に入手出来るようになり、式典・祭礼・風俗などを伝えた絵葉書が大ブームとなった。災害などの大事件のあとには、ニュース媒体としても使われた。

絵はがき・ポスター・マッチのラベル・絵ピラなどのエフェメラルメディアは、見た目が美しく、個人コレクターも多い。そして、それらが地域博物館に寄贈されることも多い。地域の祭礼・風俗・名所・建物や記念物を映し取った絵はがきは、貴重な地域の史料として活用されていくだろう。

おわりに

大学付属研究所・大学図書館・図書館・文書館などでは、研究成果を市民へ伝え所蔵する資料を公開する必要性がさげばれており、デジタルアーカイブの作成と公開は当たり前となりつつある。しかしながら、それらの質は玉石混交であり、正確な資料名・所蔵番号すら不明で、単にデジタル画像を公開しただけのものから、画像上の文字を全文解読したもの、さらには「デジタル絵引き」と呼びうる高度な表示機能を備えたものまで様々である。⁽¹²⁾ いかにも豊富な史料を持つ研究機関であっても、一つの研究プロジェクトを貫徹するためには、他機関から提供を受けたデータを使用しなければならない。翻って神奈川大学非文字資料研究センターは、庶民の生活を描いた画像史料を豊富に所蔵していない。従って、当面は他所蔵機関の画像史料や調査地にある建築物等のモノ史料を詳細に調査したうえで高精細な画像データを収集し、デジタルトレースや文字情報の解読・CADソフトによる作図等を行い、解析のうえ研究成果を発信する方式が採られていくであろう。基礎となるデータベースは日本語を基礎とし、英語・中国語・韓国語などの他言語で組まれることと推測される。そして研究成果は、論文・書籍・WEB公開、さらには巡回展を視野に入れた大学博物館での展示により広く発信されるべきである。

この小論で述べたように、画像史料の調査・撮影・収集、解析作業、そして研究成果の発表はデジタルデータベースにより、大きく進展している。歴史・民俗分野の研究者は、画像史料が歴史的事実と過去に生きた人々の心性を雄弁に物語る歴史資料であることを、研究や展示などによって示さなければならない。

注

- (1) なお、デジタル化は完全な技術ではなく、フィルムによる資料撮影は必要である。デジタル画像は容易に失われてしまう。データを一時的に書き込むハードディスクは消耗品であるし、CD・DVDディスクも専用の容器に保存しても数十年の寿命だといわれる。2011年の現在でも、大型のポジフィルムによる撮影が後世に史料情報を残す最も優れた方法である。
- (2) 「摺物(すりもの)」とは「書物や摺本、あるいは錦絵や浮世絵とは、はっきり区別された単色ないしは若干色摺りの一枚か数枚の印刷物(木版・銅版・石版・活版を含む)」と定義する。また「瓦版」という語は「当時のこの用語の使用例が見当らず、また高度に発達した木版摺り技術の結晶でもある摺物の特質にそぐわない価値判断を与えかねない」ため、「瓦版」の語は使わないとしている(『東京大学史料編纂所付属画像史料解析センター通信』第1号、1998)3頁。
- (3) 錦絵は江戸の地本問屋が企画し、浮世絵師が版下を描き、彫師と摺師の巧みな技のコラボレーションで制作された、江戸特産の出版物である。江戸の地本問屋については鈴木俊幸『絵草紙屋 江戸の浮世絵ショップ』(平凡社、2010)に詳しい。
- (4) 古写真、特に初期の写真技術に関しては、斎藤多喜夫『幕末明治 横浜写真物語』(吉川弘文館、2004)を参照。
- (5) 展示会の成果は『ニュースの誕生』(東京大学出版会、1999)、データベースは『ニュースの誕生 かわら版・新聞錦絵データベース』(CD-ROM, 試作版)として結実した。
- (6) 錦絵新聞(新聞錦絵)の研究史に関しては、千葉市美術館編『文明開化の錦絵新聞』(国書刊行会、2008)参照のこと。
- (7) 現在ならば、業者に委託し直接デジタルカメラで撮影することが、高精細画像(TIFF)を得る簡便な

方法である。なお、デジタルデータは記録媒体が破壊されれば容易に失われてしまうので、最も望ましいのは前述の通り、ポジフィルムによる撮影である。そして4×5判もしくはブローニー判（6×7判）のポジフィルムを透過原稿ユニット付きのスキナーでRGB 24ビット・600 dpi以上の精度で読み込むことで、高解像度のJPEG画像を容易に得ることができる。

- (8) 「黒船かわら版の情報」『年報 人類文化のための非文字資料の体系化』第2号（神奈川大学21世紀COEプログラム, 2004）および、「黒船かわら版とそれ以前」『アメリカ太平洋研究』Vol.5,（東京大学アメリカ太平洋研究センター, 2005）.
- (9) 富澤達三『錦絵のちから 時事的錦絵とかわら版』（文生書院, 2004）参照.
- (10) 増野恵子「明治天皇のイメージの変遷について 石版画に見いだせる天皇像」（『美術史研究』38, 2000）
- (11) 土屋礼子「エフェメラとしての戦時宣伝ピラ — FELO 資料の場合」『アジア遊学 111号 特集 戦争とメディア, そして生活』（勉誠出版, 2008）を参照した.
- (12) 秀れた例として渋沢栄一記念財団の「実業史錦絵引きデータベース」（<http://db.ebiki.jp/>）がある.